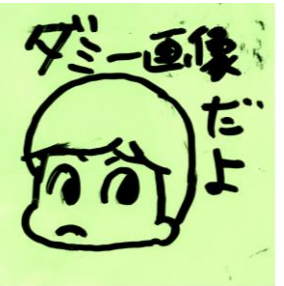
百卒隊長の信仰のヤバさ



先日、妹から「母と連絡が取れない」というラインが来た。なんでも、昨日の夜に連絡をしたが既読がつかないらしい。いやいや、２～３日連絡がなくて心配になるのはわかるが、夕方に連絡して翌朝８時、さすがに心配しすぎすぎだろ。と思ったが、「今までこんなことなかった」と本人は真剣だ。念のため実家に出向いてみたが、案の定、母はスマホが壊れてラインが送れなかったという顛末。事実確認が取れた妹はようやく安心したようだ。メッセージの『既読』機能にしろ、荷物配送の追跡機能にしろ、最近はなにかとおせっかいな機能が多い。その背景は『確認できる安心感』が欲しいというニーズがあってのことだろう。人は、自分の目で状況や結果が確認できない状態に長時間置かれることが苦痛なのだ。

しかしこれは、祈りについても同じことが言えないだろうか？私も祈ったことが、本当に聞き届けられたかどうか不安になることはしょっちゅうだ。祈りというのは、神様に送っても『既読』が付くようなものではない。一方通行ではないが、一方通行感がすごい。だから結果を確認せずして、祈りが聞かれたことを信じられる人はそれだけでつわものだ。しかし、それをさらに上回る信仰の持ち主が、マタイの福音書に登場する。しもべを癒してもらった百人隊長、その人だ。（８章参照）エピソードが短く、印象が薄いが、この百卒隊長に信仰はかなりヤバい。イエスに「これほどの信仰、イスラエルの内にもみたことないわ」と言わしめたのも頷ける。

どれくらいヤバいかというと、われらがイエスに『わざわざ来てもらう必要はない宣言』してまうくらいのＹＡＢＡさだ。「どうせ合格しているので、合格通知はいりません」という受験生がいたらこいつヤバいと思うだろう。「もし来てくれればラザロは助かった」と言っていたマリアと比較しても、そ

（コピー配布自由にどうぞ、いおりのほーむページよりダウンロード可能。）

の信仰の強さがうかがえる。もし私が現場にいたら「いや隊長、念のために来てもらいましょうよ」といさめたくなる。「イエス様の方から『行ってあげよう』と言ってくれているんですよ？お言葉に甘えましょうよ」と。いや、ある意味、お言葉には甘えた。しかしお言葉だけに甘えるとは予想外だ。事実、イエスは触れたり、泥を塗ったりしなくても言葉だけで癒した実績がある。でも、この隊長は、そんなパフォーマンスはお手を煩わすだけだと考えた。お言葉だけで十分という信仰があった。「きっとイエス様に来てもらえれば話も聞けるだろうし、なにより安心だ」という思いはあったろう。しかし、あえて断った。ジョジョ的に言えば『だが断る』ってやつだ。「そもそも私のしもべ見たことないですよね？百人もいるのにどのしもべかわかりますか？間違えて違うしもべが治っちゃってるかもしれないので、一応確認のために来てもらっていいすか？」みたいなヤボいことも言わなかった。

なぜか、もう十分信じることができていたからである。願いは聞かれる、癒されるという確信があった。理由は自分の中ではっきりしていた。「わたしでさえ部下に命令すれば従う。それなら神の子が言葉で癒せないはずはない」、それが論拠だ。強がりはないの。信じたとその通りになったという確信があるなら、もうすでに分かっている事実確認のためのその足取りはさぞは軽かったろう。なんならば「回復祝いにカペナウムまんじゅうでも買っていってやろう」くらいの余裕があったかもしれない。きっと合格結果を見に行く重苦しい足取りではなく、入学証書を受け取りに行くような足取りだ。そのような軽い足取りで私の信仰生活も歩めればいいなぁ、そう感じたエピソードであった。

ヘブライ人への手紙 11 章 1 節「信仰とは、望んでいる事柄を確信し見えない事実を確認することです」（新共同訳）。

文：いおり　四コマ作家。漫画家、紙芝居職人、執筆家。SOM 代表。